

# パーソナリティ理論からみた勇気

— クロニンジャーの理論から

慶應義塾大学商学部 准教授

木島伸彦 (きじま のぶひこ)

Profile—木島伸彦

1996年、慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程社会学専攻単位取得退学。専門はパーソナリティ心理学。著書は『クロニンジャーのパーソナリティ理論入門：自分を知り、自分をデザインする』（北大路書房）など。



「勇気」とは、様々に語る事ができる人の美德の一つであると言えます。プラトンは、ソクラテスと青年メノンによる「徳」についての対話を『メノン』に書いています。しかし、結局、「徳は教育できるのか」という問いに対しての解答がありません。クロニンジャーのパーソナリティ理論では、プラトン哲学を哲学の中では最重要視しているのですが、『メノン』で語られることがなかった「徳は教育できるのか」という問いに対して、脳科学や遺伝子工学を含む現代の最新理論を援用して、答えようと試みています。

まずは、クロニンジャー理論自体があまり知られていないと思われるので、その理論の基礎を説明します。

## クロニンジャー理論の基礎

クロニンジャー理論では、人の個性を説明する包括的な概念としてパーソナリティを「環境に対する独特な適応の仕方を決定する心理生理的なシステムをもつ個人内の動的な構成体」と定義しています。そして、このパーソナリティには、3つの様相があると考えられています。「気質」とは、無意識に周りの環境に自動的に反応する特徴に関わる特徴で、「性格」とは、意識的に自分の行動をコントロールしようとする特徴です。さらに、「アイデンティティ」と

は、自己実現のための創造的探索としての未来への価値観や希望を含む、自分の体験に基づく自覚の特徴です。本論では、気質と性格に焦点を当てます。

気質と性格の大きな違いは、気質は無意識による反応であるのに対して、性格は意識的な行動であるということと、気質は変わりにくい、性格は変わりうるし、成長しうる、という2点です。この両者の関係は図1のように表されます。この気質と性格は、クロニンジャーによって開発されたTemperament and Character Inventory Revised (TCI-R) によって測定されます。

①気質 「新奇性探求」は、新奇刺激を求め、行動が活性化されやすいかどうかに関わる特徴で、ドーパミンと関連があると報告されています。「損害回避」とは、

潜在的でネガティブな刺激に対して、行動を抑制したり回避したりするかどうかに関わる特徴で、セロトニンと関連があると報告されています。「報酬依存」は、社会的刺激に影響を受けやすいかどうかに関わる特徴で、ノルアドレナリンと関連があると報告されています。「固執」は、部分強化しか得られないときにでも行動を続けられるかどうかに関わる特徴です。この特性と特定の神経伝達物質との関連性は想定されていないのですが、セロトニンと関連性があるという報告もあります。

これらの気質と遺伝子との関連性については数多くの研究が行われ、全てのゲノムとの関連性を検証した大規模な研究で、関連性が無かったという報告がありました。しかし、一つひとつの遺伝子との関連性ではなく、複数の遺伝

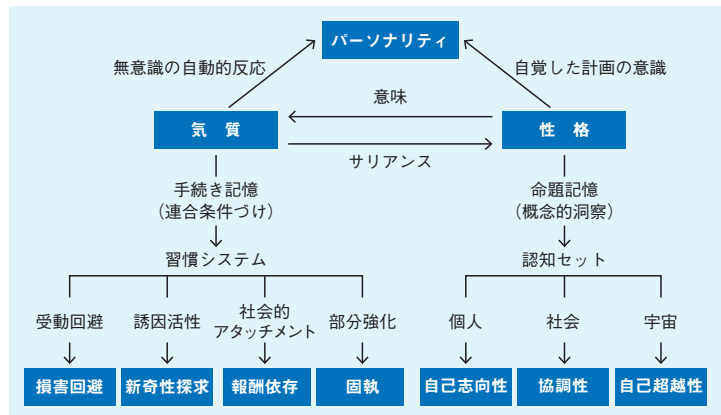


図1 クロニンジャー理論における気質と性格の関連性

子多型のセットが統合失調症における遺伝子の影響度を説明できたという報告があり、気質でも同様の研究が行われているところだ。

②**性格** 自己概念について洞察学習することによって成人期に成熟し、自己の有効性、あるいは社会の有効性に影響するものであると想定されています。「自己志向性」、「協調性」が未熟であるとパーソナリティ障害になりやすいという報告があります。

「自己志向性」とは、各個人が選択した目的や価値観に従って、状況に合う行動を自ら統制し、調整し、調節する能力に関わる特性です。「協調性」は、他者の受容に関する個人差を説明する特性で、協調性のある個人は、寛容で、同情的で、協力的で、しばしば発達心理学において成熟のサインと見なされます。「自己超越性」には、すべてのものがひとつの全体の一部であるとする「統一意識」の状態を含みます。このような統一的観点は、自然とその資源の受容、確認、または霊的統合として記述できます。

#### プラトンの四元徳と魂の三部構成

プラトンは、魂を、「理知」(logistikon)、「気概」(thumos)、「欲望」(epihumia)の三つの部分から構成されるものと想定しています。そして、理知を働かせることが「知恵」であり、気概が外に形をとって表れる姿こそが「勇気」です。そして、大いなる欲望を達するためには、目先の欲求にとらわれてはいけないことから「節制」が求められます。これら、「知恵」と「勇気」と「節制」とが相互に調和して、全体として「正義」が実現されるとプラトンは考えています。この「徳」の考え方を四元徳と言います。

さらに、プラトンは、これらの関係を御者のメタファーによって説明しています(図2)。御者が2頭の馬に引っ張られていて、黒馬は醜く乱暴に、白馬は高潔で従順に描かれています。

御者は、直観的洞察(noesis)に伴う理知を象徴していて、その知性は論理的であり、唯論的あるいは分析的思考(dianoia)以上のものであるとされています。

乱暴な黒馬は、「欲望」による不合理な行動を表し、高潔な白馬は「気概」による不合理な行動のコントロールを表しています。プラトンによると、「理知」、「気概」、「欲望」は、身体の異なる3つの部分、内臓(gut)、こころ(heart)、頭(head)、の機能と相当し、食欲や感情は内臓に由来し、協調や勇気はこころに、理知や直観的洞察は頭に属すると想定しています。このことは、現代の神経科学によっても確認されています(Cloninger, 2015)。

「勇気」と関連するのは、プラトンの言うところの「気概」であり、神経科学的には、こころの機能と関わる、と言えます。

#### クロニンジャー理論による「勇気」

さて、プラトンの理論をクロニンジャー理論ではどのように説明するのでしょうか。3つの気質、新奇性探求、損害回避、報酬依存が「欲望」に、協調性と固執の組み合わせが「気概」に、自己志向性と自己超越性の組み合わせが

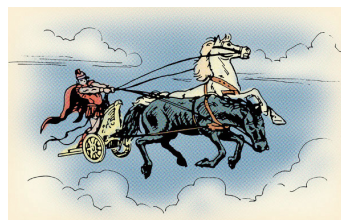


図2 プラトンにおける魂のメタファー

「理知」に相当する、と想定しています。

したがって、「勇気」の徳と関連するのは、クロニンジャー理論で言えば、性格特性の協調性と気質特性の固執ということになります。前述のTCI-Rによってこれらの特性が測定できるので、「勇気」についても、間接的に測定できると言えます。さらに、これらの特性と脳機能、遺伝子などとの関連性について実証的に研究し、そのシステムについて検証することができ、かつ、最初の疑問である「徳は教育できるのか」という問いに答えることもできるのです。

脳科学の研究によると「固執」は腹側線条体、眼窩前頭皮質、前帯状皮質を含む報酬系と関わり、「協調性」は上側頭回、中前頭回、前頭前頭皮質と関わっているとされています(Cloninger, 2015)。さらに、協調性は教育可能で、その特性を高めることが可能です。固執の特性を変容させることも、自分で自分の気質特性を理解するだけで可能です。したがって、少なくとも、人の美徳のひとつである「勇気」については、クロニンジャー理論によれば教育可能であると言え、またその実際の方法も提供されています(Anthropedia Institute; <http://anthropedia.org/>)。

## 文献

- C. R. Cloninger. (2015) Plato's tripartite view of the human psyche: evidence from the evolution of human brain functions. In D. S. Stoyanov(Ed.) *Towards a new philosophy of mental health: Perspectives from neuroscience and the humanities*. Cambridge Scholars Publishing.